５　次の文章は、平安時代後期から鎌倉時代にかけての歌人・藤原俊成が「初春の初子の今日の玉箒手にとるからにゆらぐ玉の緒」という和歌の成立に関する二つの伝承をあげ、自説を述べたものである。この文章を読んで、あとの問いに答えよ。　　　　　　　　　　　　　〈滋賀大〉二〇一九年度出題

　　初春の今日手にとるからにらぐ玉の緒

　「この歌は、万葉集に入れる本もあり、また、無き本もあり」と申すなり。これを、俊頼朝に申したるは、「『玉箒』といふは、春の初子の日、小松をひき具してに作りて、田舎の人の家に蚕飼ふ屋を、子午の年生まれたる女の、蚕飼ひするにものよきをと付けて、それしてき初めさせて、祝ひの詞にいふ歌なりとぞいひ伝へたる」と申す。

　能因法師の大納言経信卿に語りけるとて申したるは、「これは、昔、京極のと申すは、院の大臣のなり。（中略）その御息所の、昔、三井寺のに志賀寺とて、殊の外じ給ふ所ありとて参り給ひけるに、かの寺近くなりて所の様おもしろくおぼえ給ひければ、御車の見を広らかに開けて、湖の方など見つかはしける程に、いと近く岸の上にあさましげなる草ののありけるに、窓の内より、殊の外に老い衰へたる古法師のＡ眉の霜の下より目を見合せ給ひたりければ、『いと難しきものにも見えぬるかな』と思して引き入らせ給ひにけり。さて、帰らせ給ひて後、老法師の腰二重なる⒜が、にすがりて参りて、『参し侍りし老法師こそ参りたれ』と申しければ、しばしは聞き入るる人もなかりけれど、ひねもすに立ちてあまりにいひければ、『かかることなん申す者侍る』と申しければ、『しかることあらん』と仰せられて、南の面の日隠しの間に召し寄せて、『いかなることぞ』と問はせ給ひければ、しばしばかりためらひて、『志賀にこの七十余年ばかり侍りて、ひとへにのことを営み侍るに、はからざる見参を仕うまつりて、いかにもいかにも思ひなく、今一度見参の心のみ侍りて、寝候ふも寝られず、起きても安く居られず侍れば、　ア年ごろの行ひのらになりなんことの悲しさに、もし助けもや⒝せさせおはしますとて、杖にすがりて泣く泣く参りて侍るなり』と申しければ、『いと易きことなり』と宣ひて、を少し上げて見えさせ給ひければ、面の数も知らず、眉は白き雪などにもまさりて、皆老い変りて、人ともおぼえず。まことに恐ろしげなる様しり入れて、とばかりありて、『その御手をしばし給はらん』と申しければ、申すに従ひて御手をさし出だし給へりけるを、我が額に当てて、よろづもおぼえず泣き入りて、Ｂかの『手にとるからに』といふ歌を詠みかけ申して、『この世に生まれ侍りて九十年に及び侍りぬるに、またかばかりの喜び侍らず。この縁を以て思ひのごとくにの浄土に生まれ侍りなば、必ず導き奉らん。また、浄土に生まれさせ給はば、導かせ給ふべし』と申して泣きければ、御返し、

　　よしさらばまことの道のして我をへゆらぐ玉の緒

とぞ仰せられける。これを聞きて、喜びながら帰りにけりといへるを、この歌は万葉集の二十の巻にあれば、イ、万葉集の善き本といふは、二十巻の歌の今四十首ばかり無きなり。その本には、この歌見えず。いかなること⒞にか。おぼつかなし」と書けり。

　この事を思う給ふるは、Ｃこの歌は、たとひ万葉集にあるにても無きにても、いかにも昔の歌にこそ侍るめれ。それを古き歌をも、今あることのそのことにひたる時は、詠じ出づることはある事にや。かの志賀の聖今詠めるならば、「手にとるからに」といはん事はしかありとも、その参りたりけん日、もし春の初めの初子の日にしもあらずは、玉箒にことによそふべしとも覚えずやあらん。なかなかさやうの聖などの、この古歌を知りて、「手にとるからに」といはんために思ひ出でてかくいひたらんは、玉箒も今少しとよりてやあるべからん。

（『古来風躰抄』による）

注　①　初子―正月の最初のの日。

②　玉箒―初子の日に蚕室の床を掃く儀式に用いるほうきのこと。

③　ゆらぐ玉の緒―「玉の緒」はガラスなどの玉をに通したもの。生命を意味する場合がある。ここでは「ゆらぐ玉の緒」に共鳴して触れる者の生命力が強まる様子を表す。

④　口伝―ここでは源俊頼によって書かれた『俊頼髄脳』を指す。

⑤　本院の大臣―藤原時平。延喜九（九〇九）年に死去。

⑥　験じ―「験ず」は霊験を現すこと。

⑦　物見を広らかに開けて―牛車の窓のを広々と巻き上げて。

⑧　見参―お目にかかる。

⑨　目守り入れて―じっと見つめて。

⑩　ことよりてやあるべからん―その場の状況にふさわしいのではないだろうか。

問１　二重傍線部⒜～⒞を、それぞれ文法的に説明せよ。

問２　傍線部Ａについて「眉の霜の下より目を見合せ」たとはどういうことか、簡潔に説明せよ。

問３　波線部ア・イを現代語訳せよ。

問４　傍線部Ｂについて、⑴誰が、⑵誰に対して、⑶どのような内容を伝えようとして「詠みかけ」たと解釈できるか、文章全体をふまえて答えよ。

◎問５　傍線部Ｃについて、なぜ俊成がそのように考えたのか説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　⒜＝主格の格助詞

　　　⒝＝サ行変格活用動詞「す」の未然形

　　　⒞＝断定の助動詞「なり」の連用形

問２　年老いてＡ眉毛が白くなった Ｂ古法師の目と、Ｃ京極の御息所の視線が合ったということ。

Ａ＝４

Ｂ＝３〔「古法師（老法師）」がなければ０。〕

Ｃ＝３〔「御息所」がなければ０。〕

問３　（ア）＝長年の仏道修行がきっと無駄になるようなことが悲しいので

　　　（イ）＝この物語はとんでもない作り話であるはずだが

問４　⑴＝老法師（古法師）が

　　　⑵＝京極の御息所に対して

　　　⑶＝Ａ再びのお目通りがかなったうえに、Ｂ手に触れることまで許されて、Ｃありがたさで生命力が強まったという内容。

Ａ・Ｂ・Ｃが揃っていなければ全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝４

Ｃ＝４〔「寿命が延びた」「長生きできる」なども可。〕

問５　『万葉集』に載っていてもいなくても、Ａその場の状況に合致している場合は古歌をそのまま詠出することがあり、Ｂ老法師は御息所に手を与えられたことに感動し、どうしても「手にとるからに」と言いたくてこの古歌を思い出したのだろうと推測したから。

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝５〔同意表現可。〕

Ｂ＝５〔「『手にとるからに』と言いたい」がなければ０。〕

【現代語訳】

　春の初めの、正月の最初の子の日の今日の、蚕室の床を掃く儀式に用いるほうきは手にとると同時に、触れる者の生命力が強まる。

　「この歌は、『万葉集』に入っている本もあり、また、載っていない本もある」と申すようです。このことを、源俊頼の『俊頼髄脳』に申していますことは、「『玉箒』というのは、春の初子の日に、小松を引き揃えてほうきに作って、田舎の人の家で蚕を飼う建物を、子午の年に誕生した女性で、蚕を飼うのによさそうな女性を飼女と名付けて、その女性に（その箒で床を）最初に掃かせて、祝いのことばとして歌う歌であると言い伝えている」と申します。

　能因法師が大納言経信卿に語ったこととして申していますことは、「このことは、昔、京極の御息所と申し上げる方は、本院の大臣藤原時平の娘である。（中略）その御息所が、昔、三井寺のそばに志賀寺といって、（仏が）格別に霊験を現しなさる所があるといって（その寺へ）お参りになった時に、その寺が近くなって辺りの様子が興味深く思われなさったので、御車の窓の簾を広々と巻き上げて、琵琶湖の方などを見やりなさった時に、すぐ近くの岸辺にあきれるほどひどい様子の草庵があったが、（その庵の）窓の内側から、格別に老い衰えた老法師が白い眉の下から目を合わせなさったので、『ひどく気味が悪いものに（顔を）見られたことよ』と（御息所は）お思いになって（牛車の中に）引きこもってしまわれた。さて、（寺から）お帰りになってのち、老法師でひどく腰の曲がった人が、杖にすがって参上して、『（先ほど）お目にかかりました（私）老法師が参上した』と申し上げたところ、しばらくは（それを）聞き入れる人もいなかったけれども、一日中立って何度も言ったので、『このようなことを申し上げる者がおります』と（女房が御息所に）申し上げたところ、『何かそうしなければならないわけがあるのだろう』と（御息所は）おっしゃって、南側の日隠しの間に（その老法師を）お呼び寄せになって、『どういうことか』と（御息所が）お尋ねになったところ、（老法師は）少しの間躊躇して、『（私は）志賀にここ七十年余りほどおりまして、ひたすら仏の道に入り成仏するための修行に努めておりますうちに、（あなたに）思いがけないお目通りをいたして、どうにもこうにも他のことが考えられず、もう一度お目にかかりたいという気持ちだけがありまして、寝ますにも寝られず、（かといって）起きても心安らかに座っていられませんので、問３（ア）長年の仏道修行がきっと無駄になるようなことが悲しいので、もしかしてお助けになってくださるかと思って、杖にすがって泣く泣く参っておるのです』と申し上げたので、『たいへん簡単なことだ』と（御息所は）おっしゃって、御簾を少し上げて（姿を）お見せになったところ、（老法師の）顔の皺は数もわからない（ほど多く）、眉は白い雪などにもまさって（真っ白で）、すべてが老い変貌して、人間とも思われない。本当に恐ろしそうな様子で（御息所を）じっと見つめて、しばらくして、『その（あなたの）御手を少しの間（私に）お与えください』と（老法師が）申し上げたので、（御息所は老法師が）申し上げるのに従って御手をさし出して与えなさったところ、（老法師は）自分の額に当てて、なにもかも忘れて泣き入って、あの『手にとるからに』という歌を（御息所に）詠み申し上げて、『この世に生まれまして九十年に届きましたが、ほかにこれほどの喜びはありません。もしこの縁によって（私が）願いどおりに阿弥陀の極楽浄土に往生しましたならば、必ず（あなたを）導いて差し上げよう。あるいは、（もしあなたが先に）浄土に往生なさいましたならば、（私を）きっとお導きください』と申し上げて泣いたので、（御息所は）御返歌に、

　よろしい、それなら仏道の導きで私を案内してくれ。（そのめでたく長らえたあなたの）生命によって。

とおっしゃった。（老法師は）これを聞いて、喜びながら帰ったと言っているが、この（『手にとるからに』の）歌は『万葉集』の二十巻に載っているので、問３（イ）この物語はとんでもない作り話であるはずだが、『万葉集』のよい伝本というのは、二十巻の歌がもう四十首ほどないのである。その本には、この歌が見えない。どういうことであろうか。よくわからない」と書いている。

　このことを考えますと、この歌は、たとえ『万葉集』に載っていてもいなくても、確かに昔の歌であるようです。（しかし後世の人が）その古歌を、今起こっていることがその古歌に（詠まれた状況と）合致している時は、（そのまま）詠出することはある事ではないだろうか。あの志賀の聖（＝老法師）が新しく詠んだのならば、「手にとるからに」と表現することは当然であっても、その参上した日が、もし春の初めの初子の日の当日でもなかったら、玉箒にとくに事寄せようと思いもしなかったのではないだろうか。かえってそのような聖などが、この古歌を知っていて、「手にとるからに」と言うために思い出してこのように詠んだとしたら、（かえって）玉箒ももう少しその場の状況にふさわしいのではないだろうか。